

Title	「成句」の分類
Author(s)	宮地,裕
Citation	語文. 1974, 32, p. 113-121
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68628
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

句

類

位置づけにあるが、本稿では、そこに至るまえに、あるいは、それ ら文へと、言語単位体の構成論を考究するにあたっての「成句」の **うるであろう。筆者にとっての中心的興味は、形態から語へ、語か** 題とされることがあり(注一)、わが国での語彙論・意味論のなかに すくなくともその一部は、近年の生成文法などでも、位置づけが問 的用法として解明しうるとばかり言えないいくつかの側面を持って ふかくかかわっている。「成句」は、 述べようとする「成句」の問題にも、言語の象徴的・比喩的用法が 復する分野あるいは中間分野に属する課題でもある。ここにすこし るが、言うまでもなく一方では言語学の重要課題の一つであり、重 ーチされるべき対象でもあり、多面的な性質を持つ課題だとも言い いる。あとで述べるように「成句」の概念内容にもよるけれども、 言語の象徴的・比喩的用法は、しばしば、文学の重要課題とされ 一部が登場することがある(注二)。いくつかの方向からアプロ しかし、言語の象徴的・比喩

> 通じて、その考察の一基盤としたいのである。 まずは「成句」そのものを見つめて、具体的用例を分類することを てみようとおもう。単位体の構成論での「成句」の位置づけ以前に、

宮

地

裕

定を採用したのは、この規定のもとにいわゆる「格言・ことわざ」 て、 永野賢担当)とほぼ同様の趣旨である。 ものをさす。」という「慣用句」の定義(『国語学辞典』「慣用句」 で慣用句というのは、二つ以上の単語がいつも一続きに、又は相応 成る句や文などを成句と言う」としておこう。この規定は、 れがあり(注五)、「成句」と「慣用句」との意味概念の広狭も、は つかうこともあるが、原語idiomとのあいだにも、概念に多少のず 用語は「慣用句」であろうし、その意味で外来語「イディオム」を の見出し項目には見えないようである(注四)。関連する意味を持つ じて用いられ、その統合が全体として、ある固定した意味を表わす っきりしてはいない。ここでは「類型的形式として二文節以上から 「成句」という用語は普通かなりあいまいな意味でつかわれてい 一般の辞典の意味記述もさまざまだし(注三)、専門の語学辞典 「成句」のほうに同趣の規 「日本

との関連において、

っての現段階での「成句」の分類を、「成句」自体としてかんがえ

いくらかの「成句」に目をとおして、筆者にと

本稿は、「成句」の分類をつぎのようにかんがえる。本稿は、「成句」の分類をつぎのようにかんがえる。ど、「慣用句」を当てるのがよいとおもうわけである。でために、実質と合わないものとなっていると見たからである。つたために、実質と合わないものとなっていると見たからである。つたために、実質と合わないものとなっていると見たからである。つたために、実質と合わないものとなっていると見たからである。つてしまうため、用語として無理が生ずるとおもうわけである。地にすると、「慣用句」の概念が、のたぐいも入れられるからであり、いわゆる「慣用句」の概念が、のたぐいも入れられるからであり、いわゆる「慣用句」の概念が、のたぐいも入れられるからであり、いわゆる「慣用句」の概念が、のたぐいも入れられるからであり、いわゆる「慣用句」の概念が、

成 句 () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | () | (

したい。(日連語成句)

=

て、歴史の波に洗われて安定するのでなければ格言とは言えないでは、でいところがあるけれども、ここでは、「歴史的・社会的に安定にくいところがあるけれども、ここでは、「歴史的・社会的に安定にくいところがあるけれども、ここでは、「歴史的・社会的に安定にくいところがあるけれども、ここでは、「歴史的・社会的に安定にくいところがあるけれども、ここでは、「歴史的・社会的に安定にくいところがあるけれども、ここでは、「歴史的・社会的に安定にくいところがあるけれども、ここでは、「歴史の・社会的に安定にくいところがあるけれども、ここでは、「歴史の方である」というのは、でしたは、でした。

的に言えば、ことわざは教訓的真実より叙述的事態を内容とすると的に言えば、ことわざとは峻別されうるものではないが、相対たぐいと言うべきであろう。かの『エソポ物語』の寓話に付けられたぐいと言うべきであろう。かの『エソポ物語』の寓話に付けられたでいと言うべきであろう。かの『エソポ物語』の寓話に付けられたでいと言うべきであろう。かの『エソポ物語』の寓話に付けられたでいと言うべきであるが、みじかい一文としての結論となると一般的にかんがえられる。ことがらの一面についての結論となると一般的にかんがえられる。ことがらの一面についての結論となると一般的にかんがえられるものは、個人的いくつもの文をつらねた一文章によって述べられるものは、個人的いに言えば、ことわざは教訓的真実より叙述的事態を内容とするとはだけでは、たがいに矛盾する内容のものである。とればいいと言うにないが、

匹

言えよう。

▽勝って兜の緒をしめよ 一 命令的表現の格言

7束嵌よ麦て寺で▽丸くともひと角あれ

▽知らしむべからず由らしむべし

▽損して得とれ

▽馬鹿はよけて通せ

べきだとかいう意味で用いられるものもすくなくない。容易に「べ命令形式をとらずとも、そうあることがのぞましいとか、そうあるらわすのに明晰でもある。格言らしい格言という印象がつよいが、教訓が命令的表現をとりやすいことは自然である。その趣旨をあ

▽清濁あわせのむ

▽赤心を人の腹中に置く

▽治に居て乱を忘れず

▽人の病気を頭痛に病む▽角を矯めて牛を殺す

これらに接し、かつ、ことわざにも近いたぐいのものもすくなく

▽好事魔多し(用心セヨ)

▽転ばぬ先の杖(用心セヨ)

▽子に過ぎたる宝なし(大切ニセヨ)

▽燈台もと暗し(注意セヨ)

▽かせぐに追いつく貧乏なし(ヨク働ケ)

▽光陰矢のごとし(オコタルベカラズ)

格言とも言え、ことわざとも言えるたぐいである。

(1) 叙述的表現のことわざ

▽へたの考え休むに似たり

▽丸い卵も切りよで四角

、包含質のましょ食って

▽目は口ほどにものを言い▽鬼も頼めば人を食わない

▽言わぬは言うにまさる

▽馬の耳に風

▽馬鹿の孫ぼめ

▽亀の甲より年の功▽背に腹はかえられず

同類であろうが、以下のものは一層事態の叙述的性格がつよく、おきたい。意味から言えば教訓として受けとられることもある。ましくない事態を、叙述的に述べていると見て、ことわざに入れて「べし・べからず」が付けにくいし、のぞましい事態あるいはのぞ

これらも、格言とも言えるし、ことわざとも言えるたぐいだが、

▽ぬす人たけだけしい

命令的表現の格言からは、ややとおくなるであろう。

▽売りことばに買いことば

▽しゃくしで腹切る

▽話しじょうずの口べた

▽へそが茶を沸かす

▽問うに落ちず語るに落つてくるが著を著かす

▽はきだめに鶴

▽寝耳に水

はわからないものもあるようである。いまは立ち入らない。意味は、いちいち原義・変遷をたどらなければならないが、容易になど、ことわざらしいことわざという印象がある。これらの本来のなど、ことわざらしいことわざという印象がある。これらの本来のなど、ことらでは直接的描写による叙述と言えるが、おおくは比喩的・これらのうち、「ぬす人たけだけしい」とか「話しじょうずの口

五

い。そのなかの語句が比喩的・象徴的に用いられ、全体としても単「慣用句」は格言・ことわざほどの価値観をともなうものではな

ける。これも峻別しがたいものであるが、前者は、ことわざにちか 前記のとおり、これを「直喩的慣用句」と「隠喩的慣用句」とに分 なる連語句ではなくて、派生的な意味を持つにいたった成句である。 ▽泣かんばかりの

直喩的慣用句

いし、後者は連語成句にちかい。

思い」「…(ん)ばかり」などのかたちのもので、 形式上直喩と言うのが普通のものは、「…(の)よう」「…(の)

▽親ぶねに乗ったよう

▽地獄で仏に会ったよう ▽赤子の手をひねるよう

▽くもの子を散らすよう

▽棒をのんだよう

▽水を打ったよう ▽火のついたよう

▽手にとるよう

など、いわゆる目的語と動詞による句に「よう」のつくかたちのも

のをはじめ、名詞に「のよう」のつくかたちの、

▽夢のよう

▽嘘のよう

▽屁のよう

▽破れ鐘のよう

などもこれに入れられる。つづいて、

▽わらにもすがる思い

▽死ぬ思い ▽血を吐く思い

▽雲つくばかりの

▽水もしたたるばかりの

の」と「思い」の複合したかたちがとれるものもある。

などがあげられよう。「死なんばかりの思い」のように、

「ばかり

▽木で鼻をくくる

▽尻に火がつく

▽ほね身にしみる

▽鬼気迫る

▽膏血を絞る

▽声涙ともに下る

▽口角泡を飛ばす

なども、準じてよいもので、ただちに「よう」「ばかりの」などを

あとに付けてつかうこともできる。

二 隠喩的慣用句

隠喩的慣用句と呼ぼう。 り、その成句全体としてそのような意味を持っているとき、これを

▽肩を持つ

▽兜をぬぐ

▽羽をのばす

▽そば杖を食ら

▽恨みを飲む

成句のなかの語が、原義からの派生的・象徴的意味を持っていた

▽肝に銘じる

▽裏目に出る

▽ねこばばをきめこむ

▽馬が合う

味で用いられ、原義の「手」や「焼く」の意味が生きていないのと 味は生きていない。「手を焼く」が「もてあます・閉口する」の意 おなじである。

ない。すくなくとも、急速につかわれなくなってきている傾向があ 系のものがすくなくないが、現在では案外一般につかわれることが って、やや特徴的と言えるように思う。格言・ことわざにも、漢文

点によってのことである。この類のものには漢語をふくむ一群があ ことの一つであるが、さきの「直喩的」との対照上簡明だという利

これらを「隠喩的」と称するのが適切かどうか、なお検討すべき

われるように見える。 ると言えそうである。隠喩的慣用句においても、同様の傾向がある かもしれないが、格言・ことわざにおけるよりは、漢語がまだつか

▽苦杯を喫する

▽胸襟を開く

▽愁眉を開く

▽烙印を押す

▽画餅に帰する

▽一瞥を与える

などである。複合語に古語が残存するのと類似の事情があろう。

力を入れる」などの意味で用いられ、原義の「肩」や「持つ」の意 などが、まずあげられる。「肩を持つ」は、「味方をする、一方に

▽くらべものがない ▽とりえがない

▽気にくわない

ない。

用いられにくいものがある。前者はかなりおおいが、後者はおおく まず、否定的形式で用いられるもの、および、一般に否定的形式で てはいないが、類型的な群をなすかと見られるものを一二あげれば、

ほかにも隠喩的慣用句はすくなくない。まだ、その種別を立てえ

▽埓があかない

▽平仄が合わない

▽しかた (が) ない

▽果てし(が)ない

▽止めど(が)ない

とんどない。「…(が)ない」のかたちのものは、「が」を略する これらは、肯定形または「ある」のかたちで用いられることがほ

ことがおおく、形容詞的に熟合しやすい。 これに対して、一般に否定的形式では用いられにくいと見られる

ものは、 ▽頭にくる

▽居丈高になる

▽首ったけになる

という直接の否定形終止法はとりにくく、 など、「頭にこない」「居丈高にならない」「首ったけにならない」 「頭にくることがない

もともとの肯定形を連体句として維持しようとするわけで、慣用句 「頭にくるようなことはない」などのかたちをとる傾向がつよい。

存立を言うことに意味があるばあいに、こういう傾向があらわれや の一傾向と見られるのではなかろうか。積極的にその事態の存在・

ものも一群をなすとおもわれる。 形容詞・形容動詞を後部要素とし、おおく連体法として用いられる すいかとかんがえられる。 これらのほか、身体語彙をふくむ隠喩的慣用句も一群をなすし、

▽顔がひろい

▽肩身がせまい

▽腹がくろい

▽たぐいまれな

▽耳がいたい

▽小股の切れあがった

う。しかし、結びつく相手は一つとはかぎらない。「地の利を得る」 やすい。「持ちくずす」と言えば「身を持ちくずす」が想起されよ ぐ」が想起され、「地の利」と言えば「地の利を得る」が想起され 連語のうち、述語的部分を持つ句となっているものの意である。凝 「連語成句」と称したのである。「雨つゆ」と言えば「雨つゆをしの いが、一般の連語句より相対的に安定した類型的形式をなすものを 結度の高い低いということは相対的なもので、明確には規定しにく 句である。連語句というのは、普通いう二語以上の連結体としての 「連語成句」と称したものは、一般の連語句より凝結度の高い成

> なすものと言えよう。このように、 るいは特定のいくつかの連語句が安定した類型的形式として成句を

▽勝手がちがう・いい

▽手を染める・出す・かける

▽身を持ちくずす・挺する

▽苦にする・なる

▽愚痴を言う・こぼす

など、後部要素が二つ以上ありうるものもあり、

▽心に・気に・目にとめる

▽みちに・道理にもとる

▽ぴんと・ぐっと・ぱっと来る

▽人目を・ひまをぬすむ

格助詞のかわるものもある。 など、前部要素が二つ以上ありうるものもある。述語動詞に応じて

▽白い目で見る・を向ける

▽パイプが通じる・をつなぐ

ことができよう。 けではないが、以下のごときものを連語成句の代表的なものという の一種としての連語成句ではなくなってしまう。境界線が明確なわ いろいろな語をとることができるものは一般連語句であって、成句 格助詞もいろいろとることができ、相手の要素にもかなり自由に

▽にらみをきかす ▽地をはらう

▽あかしを立てる

▽あおりを食う

い・わるい・つよい・よわい・つく・もめる」などがある。一つあ のほかに「地の利がいい・わるい」もある。「気が」の相手には「い

▽罪を着せる

▽手心をくわえる

▽目ぼしをつける

▽末席をけがす

▽息を殺す

▽ものごしがやわらかい▽風邪がぬける

▽手くせがわるい

▽変り身が早い

▽出ぐせがつく

▽鼻先であしらう

▽その話で持ちきる

▽まんじりともしない

れる。 に、 成句の一般的性格の一つをきわだたせているようにおもわまうで、 成句の一般的性格の一つをきわだたせているようにおもわまうで、 成がしばす」などの日常的なもののほかは、 漢文由来とおもわれる にはす」などの日常的なもののほかは、 漢文由来とおもわれる にはて、 和語によるものが圧倒的であって、 漢語をふくむものは

4

4手は、おおかれすくなかれ、なんらかの制約を、意味的・文法的語や文節が連結して句や文をなすとき、その語や文節の結びつく

成句のなかでは制約のもっともゆるやかなほうに属するかたちと言成句のなかでは制約のもっとはかぎらず、いくつかの相手がありうる。年が、かならずしも一つとはかぎらず、いくつかの相手がありうる。たれがおおくなればなるほど、一般の連語句にちかづくわけだから、たれがおおくなればなるほど、一般の連語句一つ一つは、それなりに安これらにつぐものと言えよう。連語成句一つ一つは、それなりに安これらにある。文として固定的な格言、句として固定的なことわざは、成句である。文として固定的な格言、句として固定的なことわざは、成句のなかでは制約のもびしいものに属するかたちがに受けるものであるが、その制約のきびしいほうに属するかたちがに受けるものであるが、その制約のきびしいほうに属するかたちがに

成句は、おおまかには一定の形式と意味を持つ句だから、文法的 成句は、おおまかには一定の形式と意味を持つ句だから、文法的 東実か語彙的事実かという分けかたをすれば、語彙的事実に類することではあるが、連語成句においては、あきらかに両者のからみあら性格が見られ、一般連語句では一層顕著になる。一般連語句に内在すると予想される法則的事実は、抽象度をたかくすれば文法の問題になるが、抽象度をひくくし、具体的な語や文節の個々の関係を見るということになればなるほど、語彙的な問題になる。一般連語句に内をに発展させていくならば、おそらく、結果として本稿のような内容に発展させていくならば、おそらく、結果として本稿のような内容に発展させていくならば、おそらく、結果として本稿のような内容に発展させていくならば、おそらく、結果として本稿のような内容に発展させていくならば、おそらく、結果として本稿のような内容に発展させていくならば、おそらく、結果として本稿のような内容に発展させていくならば、おそらく、結果として本稿のような内容が、記述の順序は逆のものもできあがるであろう。辞典の語彙明字は対して、あるいは子見出しとして、これらの連語成句がとりあげられることがおおいのもそのためであり、大辞典となれば、おおくの格言・ことわざまで収録しようとするのも、

はじめに述べたように、「成句」は多面的性格を持つものであっ

て、さまざまなアプローチが可能であり、また、 いが、本稿では、その分類に限定して概述した(注七)。 しなければならな

つぎのように述べたところは注目するに足りよう。(『国語学』九 |集 1973) 青木晴夫がチェイフ (Wallace L. Chafe 1927-) について、

げれば、『手を焼く』という場合、『手』とか『焼く』とかいう意 らべき過程が、意味構造と表層構造との間の相違を作る原因とな 味の側では、意味変化、特に慣用化(idiomatization)とでも言 層と表層の間に認めたと同じような相違があると考える。……意 語形化したもの (literalization) の間には、チョムスキー派が深 てはならないと考える。このためチェイフは、意味単位と、その ち意味後の配列(postsemantic configuration)に変えられなく が音韻の領域にはいる前に手とか焼くなどの別種の単位、すなわ から、まず『もてあます』のようなものが意味構造にあり、これ 味はなく、『もてあます』というのが意味である。このような例 きない例として慣用句 (idiom) に注意を向ける。日本語の例をあ 方チェイフは、形態素そのものを意味単位として考えることので 音韻構造に変わり、音声構造に連なると考えるようになった。一 キー派の理論の影響で、意味構造は、まず表層構造を経て、基底 素を介して右の音声構造に到達すると考えたが、やがてチョムス 「初めのモデルはH型をしていて、左の意味構造から、 形態音

書目にその関係のものらしいものも見えるが、以後この方面での チェイフの一九六七年ごろまでの研究のなかでのことのようで、

> この方面のことはしばらく置いて、ややひろく認識論や心理学の 考究の深化があったのかどうかは知らない。青木論文によれば、 ほうへの関心をふかめているようである。

1971)° **う。ただし、「詳細については、今後の研究に待たなければなら** ないことが多いと思われる」という(安井稔編『新言語学辞典』 ムの言語モデル論上の位置づけや解釈のために重要な発想であろ 中間的な「表示のレベル」(level of representation) も、「呼応 フ(R. Lakoff)らの「浅層構造」(shallow structure)という 「名詞の照応規則」(Anaphora rule)などとともに、イディオ 関連するとおもわれるが、 ポスタル (P. M. Postal)、 レイ

(注二)『語彙教育』(教科研言語教育研究サークル、1964)は「第 八章慣用句」において、「いくつかの単語がいつもかたくむすび ④慣用句の範囲、 形からみた慣用

(注三)「成句」を「ことわざやそれに類するもの」とし、「故事成 語以上から成るきまりもんく。例、いちかばちか」としたりする か』と言うなど」としたり(『新明解』)、「習慣的に使われる、二 慣用的な表現。例、突然の出現を『天から降ったか地から涌いた よりも、間接的に言った方がその内容を端的に表わすと見られる、 それ以外に、「ある意味を表わすのに、それを直接そう表現する のは、他の辞典によって見ても、共通的な理解のようであるが、 句」という熟語をつくることがあるとする(『新明解国語辞典』) ついて用例をいくつかあげて述べている。 ②慣用句の文法的特徴、③慣用句の諸段階、 用句』という」とし、①意味からみた慣用句、 ついてつかわれて特別の意味をあらわす単語の組み合わせを『慣

る。(『岩波国語辞典』)のは、かなりゆれている意味の部分と見られ

(注四) 「成句」という術語は『国語学辞典』の見出し項目・事項索引に見えない。『英語学辞典』『新英文法辞典』『新言語学辞典』などの「日英用語対照表」や日本語の事項索引にも見えない。『成句」に当たる英語は an idiomatic phrase, a set phrase などのようであるから、英語学等の専門用語ははっきりしない。他の諸語学での実情とあわせ、御教示をまちたい。 だ五〕 原語 idiom には、しばしば、非文法的だが慣用として通用する表現形式をいうことがある。Idiomatic English の例として、"It's me." "Who is this letter from?" などがあげられたりする。日本語の「得せしむ」「無理からぬ」「埓があく」などを「慣用句」とする(『国語学辞典』永野賢)ことは、たしかにあることであろうが、これを「イディオム」と称することは、まずないであろう。このへんが、原語 idiom と外来語「イディオム」との概念のずれとして目立つところである。

見解」であって、「ロシア語の文法論でヴェ・ヴェ・ヴィクグラ「連語論」は、「文論からとりたててシンタクスの一分野とするという用語がもちいられているが、近年あらためて言われているという用語がもちいられているが 近年あらためて言われている(注六)「連語」「連語論」という用語も、従来、概念の明確ではな

的に連載)、鈴木重幸『日本語文法・形態論』1972――を格の名詞と動詞との組みあわせ――」(『教育国語』に断続るものが目立つぐらいであろう。奥田靖雄「日本語文法・連語論研究会(教科研)奥田靖雄らによる調査・考究のすすめられていげっを中心として展開されている」のに対して、日本では言語学

(注七) 本稿での限定によって述べのこしたことの一つは、いうまでもなく、格言・ことわざ・慣用句・連語成句の語学的各論と、の記述が見られるが、国語学的には未開拓の部分がおおきい。近年の白石大二『国語慣用句辞典』1969、『日本語発想辞典』1972にも関連する記述があるが、論に至らない。B. Fraser: Idiomswithin a Transformational Grammar 1970 もたまたま目をとおすことができたものの、その方面の代表的な論文の一つと聞くわりには、示唆に富むとは言えないようにおもわれる。わりには、示唆に富むとは言えないようにおもわれる。

に別稿を期したいところである。

(本学助教授)
なお考究の余地がすくなくない。構文上の問題としては、いわゆなお考究の余地がすくなくない。構文上の問題としては、いわゆなお考究の余地がすくなくない。構文上の問題としては、いわゆなお考究の余地がすくなくない。構文上の問題としては、いわゆなお考定の余地がすくなくない。構文上の問題としては、いわゆなお考定のかかわり、と述べのこしたもう一つのことに、成句と構文とのかかわり、と述べのこしたもう一つのことに、成句と構文とのかかわり、と述べのこしたもう一つのことに、成句と構文とのかかわり、と述べのこしたもう一つのことに、成句と構文とのかかわり、と